

美術展覧會の子ども

倉橋惣三

嘗ては、年々の美術展覧會のたびに、その中の子どもを描いた繪についての所感を本誌の上で語るのが、わたしにとつての恒例（吉例でも幸例でもなかつたらうが）であつた。この秋の上野は、その悪例を再びさせることになつた。

日本美術展覧會の陣列作品は、多過ぎるほど多い。その中に、子どもを描いた作も随分多い。子どもというものが、こうまで藝術家の關心をひくことは、子ども黨として先ず嬉しいことである。わたしは、一般藝術作品として傑出したものゝ前に、足を長く止めた間にも、子どもの描かれている作には、繪としての如何（失禮）に拘わらず、見落しなく目を配つた。

さて、一巡の後、わたくしは疲れた目を畫廊のベンチに閉じて思つた。——僕が子どもについて見出したかと思つてゐるよう

な點を、しつかりと描いていて呉れている畫家は少ない。まして、僕が思いもつかない子どもを、僕を驚かさほど深く描いて數えていて呉れている畫家は少ない。子どもの外の姿を表現してはいても、内の子どもを發見している畫家は少ないと。そうして「そんなことは、初めから考えてもいないよ」と、藝術家諸君がいわれれば、それだけの話だと氣がついた時、わたくしは目をあけて、ベンチを立つた。（こんな腹想？）のでないことも、招待券に對して禮を失するものにならうともいふまでもない。

○

子どもの心——その年頃の心の動きを描き出そうとしているものとして、海老名正夫氏の「夕」と、堂本阿岐羅氏の「草原」と、中枝子氏の「窓邊」とが目に残る。初

めの二つは日本畫で、後の一つは西洋畫である。子どもといつても、いずれも十二三才で、少年少女期の、ある心の動きを捉えようとされている。「夕」では、農家の前庭らしい涼み藁に、斜め向きに後ろを向いて掛けている姉（？）の横に、こつち向きに兩手をうしろについて、パンツ一つで腰かけている妹が主題である。その妹が、そばに居る姉に全く無頓着な姿勢、うわ向きに、遠くの空でも見ているらしいうつとした目、低い聲で歌でもうたつてゐるらしい口もと。娘にならうとする一步、否、二三年前の、この年頃の女の子の心の動き方の心理學的用語では、どうもよくあらわせないところが、相當なま／＼しく出ている。行水でも使つた後か、短いパンツ一つでは、じらい氣もなく、といつて、七八歳の少女とは違ふ少女を、自分は少しも氣がつかないで、どこかに匂わせてゐる。殊に、そういう點の意識的にはおおくで、生理的には、わせな傾の多い田舎の少女として、すべて素朴というものに強ひ、謂わば原始的實感性ともいえるものが、相當しつかり筆端に籠められてゐる。正直のところ、此の作の前へ来て、わたくしは、ハツとした位であつた。

堂本阿岐羅氏の「草原」と、中敷子氏の「窓邊」とは、二つとも少年である。「夕」の少女よりは一つ位も上か、大體同年齡であらう。「草原」は、三人の少女が、それ／＼の姿勢で、羊に草をたべさせ、羊と話し、羊を寫生しているそばを、一人少し離れて、何を思っているのか、ほんとに何を思っているのか、たしかに何をか思いつゝこつちへ向いて、大きな目を見せている少年である。「夕」の少女がそばの姉に無頓着なように、この少年も、そばの三人の少女達に、一應は無頓着である。一應はというのは、「夕」の少女が全然姉の存在と無關係なのに對して、此の少年が、少女達と共にいて、少女達とは別の方を向いている無關係の關係を、心理的空間の所在として見落せないと思うからである。といつてこの少年の心の中に、今その少女達があるというのでは決してない。少女達もなく羊もなく、全く別の世界を見ている目つきではあるが、いつしよに草原にいながら、ふと一人離れているところに、交りの外から、一人の内へ、ふと誘われる此の年頃の少年の心理があるのである。この少年は、普通以上にそういう傾向のある子なのかも知れないが、こうした傾向が、この年齡と

して、少女より却つて少年に多いのは常である。そうして、もう一つ手前の年齡の「空想」ともう一つ後の年齡の「瞑想」との間にある。この年齡の、心の内向を、弱くもなく強くもなくあらわすことに、作家の苦心はあつた筈であると、差し出がましくも察してみずにいられなかつた。

中敷子氏の「窓邊」は、同じく此の年齡の（草原の少年とは少し年長か）少年の内へ動く心を描いたものだが、後ろにピアノがあり、そのピアノの弾き手の上半身は見えないで、ベタルの上の足だけが見えていたといつた、餘韻の多い背景からしても長椅子に一人腰かけてそれを聴いている此の少年の心の動きは、「夕」の少女、「草原」の少年の場合よりも、はつきりしたイメージに凝集していることが思われる。それだけ、一般の少年心理描寫としてよりは音楽を聴いている少年という、限界のはつきりした心理描寫にもなるが、そこから、「少年」を抜き出して考えてみるころにわたたくしへの課題が生れる譯である。そこで、その課題への直接の答案は別として、課題の形でとり上げただけに、繪そのものから少年心理として迫られる力は、この三つの中で一番弱かつた。繪のフュクトが弱

いというのではなく、その中にある「音楽」が、寧ろ主課題になつても來るからである。そうして、その點で、「夕」の少女が、贅家に助けて貰いたいといつても希つてゐる兒童心理學徒としての、わたたくしの心に、最も深く印銘してゐる。今でも、目の前にちらつく程に。

○ かうした、謂わば子どもを、その自分において捉え、心理的に描寫してゐるのに對し、自分のない子ども、即ち子ども、無我を描いたものゝ少ないのは、贅家諸君の現代性が、レイノルドの『無邪氣』などゝはちがつた世界にいたるためだらうか。わたたくしは、ロンドンの大英博物館で、此の古典名畫の前へ、何回となく、子どもの無我を學びに行つた氣持ちを、この展覽會に求めようとしなかつたが、若しそれを求めようとしたら失望したであらう。そして、その子どもの無我の、一種の表現に、幼兒の午睡を描いた二作で縁着した。といつたら皮肉に聞えるかも知れないが、決してそんな意味でなく、この二作に敬意を表する。その一つは、田中針水氏の『午睡』である。夏ごごの上に、九歳位の姉と、六歳位の弟と、二歳位の弟とが、入り亂れた姿勢で着

睡している。そばに一つの白團扇が投げ出されてゐるのも、夏のひるまがりと思わせるが、その子どもたちが、どれも／＼如何にもよく眠つてゐる。わたくしが、姉の目と口がよく眠つてゐる、中の弟の手がよく眠つてゐると感じて言つたら、いつしよに見ていた妻が、末の子のあんよがほんとはよく眠つてゐますと感心しきつてゐた。波のある海よりも波のない海が描きにくいものだということを聞いたことがあるが、起きて動いている子どもよりも、これは、よつぽどむづかしい繪だるうと、素人ながらに思つた。もう一つの作は、笠原可於氏の『兒』である。朝顔模様の簡単なワンピースを着た十歳の姉と、はらがけ一つの五歳の弟とが、今午睡からさめたところか、寝ころんだまゝ、別にまだ話をしてゐるでもない。小猫はまだ目をつむつて横になつてゐる。姉のしていたらしい小枕がころがつてゐる。そこを少し離れて二尺ざしの物さしがころがつてゐる。わたしは、小猫を、少々わざとらしい點描と感じたが物さしには、その畫面の外に母を感じさせられて、心にく／＼も思つた。さて二人の子どもは、田中氏の繪の場合のように然睡してゐるのではない。しかし、まだはつきり

目さめてゐるでもない。面白い瞬間をつかまへられたものと思つた。そうして、そこに、或る子どもの無我が、ちらりと出ているのを見つけさせられた。とにかく、おとなで寝顔が繪になることは随分むづかしいことだろう。子どもなればこそ、その本質を以て、こゝろも美しく、熟睡出来、まどろめるのだと、いわなくてはなるまい。

噴着の子どもが、或る時代の頃のようにないのは、流石に、當代だと嬉しく思つたが、街の子、地下道の子等を見て、ムリロアがいたらばと、屢々思つたりすることのあるわたくしは、小野具定氏の『木枯の頃』の前へ来て、そこを急いで去つた妻の後に残つて、いろ／＼と自分勝手な注文に耽つてゐた。率直すぎる妄言を許されるならば、この繪を以て敗戦直後の日本の子どもの一生活面を描いた代表作とするものはあるまい。これは日本今日の「木枯の頃」の疲れ切つてうなだれている新聞賣子、やつれきつた母親に抱かれて路傍に眠つてゐる赤ん坊、そこには、目を覆わずにいられない陰惨な、敗戦児童生活の記録は充分あるが、わたしは、それが子どもである限り、記録以上の何もの（實はわたくし自身にも

よくいえない）かゞはしい。此の注文はムリロアが幾面かの乞食兒の傑作の中に、子どもというものを描いてゐるのよりも、むづかしい注文かも知れない。又、今の日本人として、小さい同胞の生活を、そんな注文で見られるものではないことでもあろう。たゞ、わたくしは、畫家に對してのみそつと、こんな注文も敢て出してみたのである。これは、この作に對する所感ではなくて、この作を機縁としての、一般所感であることを、作家にも讀者諸君にも諒としていたゞかなければならない。

(十一月手記)

再刊二書

○波多野完治著『兒童心理學』

兒童の心理の根本的特徴を解明した保育上最も有益な知識である。(東京都千代田區神田神保町一丁目同文館發行。定價金百圓)

○倉橋惣三著『育ての心』

著者の情愔に充ちた保育書として特に本誌讀者に親しみ迎えられらるであらう。(東京都文京區元町一丁目乾元社發行。定價金百圓)